樋口一葉『雪の日』論

-「人妻」物語の序幕 -

李政殷*

〈目 次〉

1．序論
2．伝統的な和歌の「ひとつま」[1)]
3．「人妻」物語の序幕ー『雪の日』
4．結論

【국문초록】

이치요에게 있어 와카(和歌), 특히 제목을 먼저 제시하고 와카를 짓는 제영(題詠)법은 소설 창작방법의 하나로 쓰였다. 즉 이치요는 소설을 쓸 때, 타이틀을 제시하고 그 스토리를 전개하는 방식을 취했던 것이다. 이치요의 각 작품의 타이틀에 와카의 타이틀(兼題)을 넣어도 전혀 이상하지 않을 정도며, 전체작품은 마치 와카의 연부(恋部)와도 같다. 이렇듯 이치요는 전통적인 와카에서 영감을 얻었지만

* 日本金沢大学 人間社会環境研究科 博士後期課程(2013年3月卒業)

1) 本論文は筆者の博士学位論文「一葉文学における古典の受容ー和歌「厭恋」「ひとつま」と朝鮮文学『九雲夢』を中心に」(金沢大学、2013年3月)のなか、第二章の第一節と第二節の一部を参考し加筆修正をしたものであるが、基本的な論旨は変わらない。

단순 답습이 아니라, 그것을 근대적인 소설로 재탄생시킨 것이다.

그 중에서도, 이치요의 전성기라 불리는 기적의 14개월 동안에 쓴 작품에서, 주로 인처(人妻)의 사랑과 삶을 그려내고 있다. 인처라는 말은 한국어에서는 사용되고 있지 않으나, 이는 결혼한 여성을 이르는 말로 와카에서는 주로 배우자가 있는 사람을 사모하는 마음을 읊조렸다. 이치요가 지은 와카에서도 인처라는 타이틀이 있으며, 이치요의 소장목록에 있는 에도시대의 와카집에서도 인처가 보인다. 그리고 작품 중에서 처음으로 인처가 등장하는 것은 "눈 내리는 날(雪の日)"이다. 이것은 인처이야기의 시작을 알리는 작품임에도 불구하고 그 연구는 많이 부족하다. 더군다나 전통적인 와카의 인처란 어떠한 것인지, 인처이야기가 소설 창작에는 어떻게 반영되었는지에 대한 연구도 전혀 없는 실정이다. 필자는 본고에서 전통적인 와카에서 인처는 어떠한 것이었으며 이치요는 작품 속에서 어떻게 그려내었는지를 고찰하였다.

결론적으로 전통적인 와카에서의 인처는 배우자가 있는 사람을 사랑하는 슬픔과 한탄 그리고 긴박감 등이 그려졌지만, 이치요는 그러한 인처의 사랑뿐만 아니라 근대라고 하는 시대의 속박에서 살아가야 했던 결혼한 여성의 삶에 초점을 맞추어 스토리를 전개했다. 그 중에서도 "눈 내리는 날"은 주위의 반대에도 무릅쓰고 사랑하는 사람과 결혼을 했지만, 결코 행복하지 않은 현실의 자신을 생각하며 사랑만을 믿고 선택했던 삶에 대한 후회와 인생의 무상함에 흔들리는 인처를 그려냈다. 그렇게 함으로써 인처이야기의 그 서막을 열었다는 점에서 문학사적 의의가 있음을 명확히 하였다. 이것은 전통적인 와카의 세계에서 그 영감을 받았지만 소설의 세계에서는 이치요만의 새로운 근대소설을 그리려고 했던 그녀의 문학성을 그대로 보여주는 단면이라 하겠다.

주제어: 히구치 이치요, 눈 내리는 날(雪の日), 와카(和歌), 제영(題詠), 인처이야기(「人妻」物語)

1. 序論

樋口一葉は和歌の世界で育てられ、和歌の中で恋の夢を見ながら、亡くなるまで和歌の世界で生き続けた女性であった。「萩の舎」の歌人として出発し、小説家として世に立つ意を抱くようになる。とくに一葉は小説の表現において殆んど恋愛から求めようとした。それは和歌の中でも恋歌にその原点があるからであるとうかがえる。つまり、一葉文学において恋愛は本格的に小説に取り組むようになってからも終始一貫している重要なテーマであったのである。

なお、一葉は小説を書くにおいて題詠手法で執筆しようとした。歌人であった一葉が小説を書こうとしたら、歌人らしい発想が作品に反映されたわけである。要するに、題を提示したうえで歌を詠む和歌の題詠のように、一葉の小説もほとんどがタイトル(題)を提示したうえで、そのストーリー(歌)を展開するという形を採っている。一葉の全作を触れると、作品それぞれに兼題を当てることができる。それはまるで和歌集の恋部のようである。このような題詠法は、初期小説ではそれほど特徴的ではなかったが、徐々に一葉なりの個性をもった創作の手法として働いていく。

さて、一葉小説のほとんどが恋愛小説であることは周知のことである。とくに全盛期とされる後半期は、人妻が主人公であって、一人のむすめが主人公であった前期の作品とは区別される。しかも、恋愛中心から少し離れ、人妻の人生そのものに焦点を当てたものが殆どである。伝統的な和歌を踏まえながらも、新たな近代小説を書き上げた彼女が、奇跡の14ヶ月と言われる期間に、人妻を主人公にして小説を書いたということは、「ひとつま」という和歌の兼題から着想を得て創作に用いたという予測を可能にする。それを裏付ける証拠として挙げられるのが、一葉が詠んだとされる江戸期の和歌集の恋部に兼題の「ひとつま」[2]がみえるこ

2) 本稿で使う表記の問題であるが、伝統的な和歌や一葉が書いた和歌の兼題では

とと、一葉の詠んだ歌にも「ひとつま」が存在することである。

このように、和歌の兼題に「ひとつま」が存在し、また一葉の後半期の6作品が「人妻物語」なのに、その研究は乏しい。しかもその始まりが作品『雪の日』なのに、「人妻物語」として述べた論がほとんどないのも事実である。

少ない先行研究の中で、人妻を主要人物として初めて言及したのは、湯地孝氏の「十三夜」[3]という解説からである。そこで人妻が登場する作品は、『雪の日』『軒もる月』『十三夜』『われから』などであると挙げられるが、とくに主人公が人妻として光っている作品は『十三夜』のお関と『われから』のお町の二人であると、人妻の立場や状況などの面から把握した。しかしこの段階では、人妻という素材が一葉の小説においてどのような意味を示しているのかまでは検討されず、所謂「人妻物」の分類に止まった感じを捨てられないのである。その「人妻物」の分類という面もあまり明確になってない。

この湯地孝氏以来、「人妻物」として認識したうえで行われた研究はなく、1980年代に至って滝藤満義[4]氏の「人妻たちの系譜―「十三夜」論」から本格的に論じられるようになる。初めて「人妻たちの系譜」という言葉を使って「人妻物」を明確に分類しようと試みたものであるが、基本的には湯地氏の分類に『この子』『裏紫』を加えて考えた論である。滝藤氏は、引き続き1984年4月「「われから」とその周辺―人妻たちの系譜Ⅱ」という論を出す。とくに「一葉が人妻物を書き続いた時代は又、社会、思想の反動化に伴い、女性の生き方にも様々の束縛が多くなった

「ひとつま」または「ひとづま」になっているため、和歌で使われたのは「ひとつま」に表記するが、一葉の小説を言及するとときは「人妻」の表記を用いることにする。

3) 湯地孝、『樋口一葉論』、日本図書センター、1983、pp. 253～254。初出は1926年10月である。

4) 滝藤満義、「「十三夜」―人妻たちの系譜Ⅰ」、『一葉文学生成と展開』、明治書院、1998。初出は『横浜国大国語研究』第1号、1983年3月である。

時期でもあった。(中略)「われから」はこのような女性の生き難い時代に、その生き難さを徹底的に味わった一葉の現実感覚と、彼女の人妻物に固有なテーマの自己展開との出会いの中に生み出された」[5]と述べたところに注目したい。つまり、一葉が当面した現実状況と一葉なりの固有なテーマである人妻物の展開との出会いから生まれたのが『われから』だという論であろう。さらに、青木一男氏は「『われから』―人妻への試み」(『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、2003年5月)という論を発表し、初めて「人妻物語」の系列として、「雪の日」「軒もる月」「十三夜」「この子」「裏紫」「われから」の六作品に言及したが、これは一番最近の論である。本稿では、青木氏の「人妻物」としての枠組みに同意する。さらに滝藤氏の「人妻たちの系譜」という言葉や、青木氏の「人妻物語の系列」という言葉を参考にし、「人妻物語」というタイトルを使いたい。

以上のような先行研究は、「人妻物語の系列」として分類はできたというものの、その作品論としては『十三夜』『われから』の二つの作品に集中され、本格的な「人妻物語」としての論は定着していない。また、人妻が初登場する作品は『雪の日』であるにもかかわらず、その研究もまだなされていないのは前述した通りである。さらに一葉の題詠の中で「ひとつま」があり、一葉が詠んだとされる伝統的な和歌にも「ひとつま」があるが、和歌に触れた論はいまだにない。

そういうわけで、本稿では伝統的な和歌での「ひとつま」はどのように詠まれたか、それは一葉の和歌とは異なる点があるのかを把握した上で、一葉の作品の中で人妻が初登場する『雪の日』は、一葉の文学上にはどのように位置づけられるのかを明らかにしたい。

---

5) 滝藤満義、「「われから」とその周辺―人妻たちの系譜Ⅱ」、『一葉文学生成と展開』、明治書院、1998、pp. 267～268。初出は『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』、1984年4月である。

2. 伝統的な和歌の「ひとつま」

1)『万葉集』の「ひとつま」

人妻といえば、常識的に人の妻、現代に言うと結婚している女性を指す言葉で認識されるが、辞典的な意味はどうであろうか。『日本国語大辞典』では、次のように出ている。

> ひとづま【人妻・他妻・他夫】(「つま」は配偶者の意)他人の配偶者。
> イ、他人の夫
> *万葉(8C後)一三・三三一四「つぎねふ山背道を人都末(ひとヅマ)の馬よりいくに己夫(おのづま)し徒歩(かち)よろ行けば<作者未詳>」
> ロ、他人の妻。また、夫のある女性。
> *万葉(8C後)一・二一「紫草(むらさき)のにほへる妹を憎くあらば人嬬(ひとづま)ゆゑに吾れ恋ひめやも<天武天皇>」
> *世間知らず(1912)<武者小路実篤>二一「人妻になってゐるのだから」

そもそも「つま」とは、「配偶者」を示し、それは男女とも同じだということがわかる。現代の意味には変わりはない。用例の中で『万葉集』の和歌がある。最初の他夫(ひとづま)は、他人の夫は馬に乗っているのに、己夫は歩いていくのでかわいそうだ、という妻の嘆きであろうか。これは、夫を心配する妻の歌で、人妻への恋を詠んだ歌ではない。次の用例は、「紫草のように、においあなたを憎いと思ったら人妻と知りながら恋しく思いましょうか」[6]という歌で、人妻への恋慕の情が詠まれている。この歌は額田王の歌に答えて大海人皇子、後の天武天皇が詠んだ歌である。この歌の意味をそのまま取るなら、いまはもう兄の妻になってしまった人妻に、いまでも慕っていると求愛する危

---

6) 小島憲之・木下正俊・東野治之校注、『万葉集』①(『新編日本古典文学全集6』)、小学館、1994、p. 37。

険な恋の歌である。また『万葉集』の中で有名と言われる歌は、「神樹にも手は触るとふをうつたへに人妻といへば触れぬものかも」という歌で、「神木でも手ぐらいは触れるというのに、人妻というと、触れてならないものなのであろうか」[7]と悩んでいる。つまり、恋慕する相手が表れたのに、人妻であるゆえ結ばれないことはなぜだろうという男性の悩みを詠んだ歌なのである。

ここで考えられるのは、他人の妻に対する恋慕の情の歌は、すでに『万葉集』の時代からあったことであろう。確かに『万葉集』では人妻への恋情を詠ったものが14首もある。この『万葉集』の14首を大まかに分類してみると、まず、①人妻なのに、どうして恋してしまったのだろうという男の心情を詠んだ歌、そして②どうして人妻に恋してはいけないのかという嘆きの歌、さらに③「断崖の上に駒を繋いで気をもむように、はらはらしながら、人妻である彼女を、命がけで私は愛している」[8]という危険な恋に命を懸ける覚悟を表している歌などの三つのパターンになる。いずれにせよ、現代の感覚でいえば不倫の心であって、『万葉集』時代の歌は社会的な倫理観よりも感情に充実した考え方で詠まれたものであったのがわかる。

2)「ひとつま」という兼題

一葉が詠んだ兼題から「ひとつま」[9](恋百首、第二期第二次<百首歌>明治21年4月)を見てみたい。一首だけが存在するが、次のようである。

---

7) 上掲書、p. 29。

8) 小島憲之・木下正俊・東野治之校注、『万葉集』③(『新編日本古典文学全集8』)、小学館、1995、p. 59。

9) 注2)で言及したのであるが、本稿で扱うタイトルに関しては次のように表記する。一葉和歌の兼題は「ひとつま」、伝統的和歌の兼題は「ひとつま」または「ひとづま」になっているため、和歌の兼題は「ひとつま」、作品は「人妻物語」とする。

53とらの尾をふむよりも猶あやふきは　人のつまをはむすふなりけり10)

要するに、禁忌された人妻への恋がどれほど危険であるかという内容であろう。これは『万葉集』にもみえるパターンである。

一葉の詠んだ歌の兼題が、「ひとつま」と明確になっているため、内容は別にしても影響関係は伝統的な和歌の兼題からその根拠を探るべきであろう。それでは、『万葉集』以来この「ひとつま」という題が見られるのはいつからであろうか。またその内容はどうであろうか。

初めて登場する類題和歌集は、『古今和歌六帖』(貞元・天元976－983年頃の成立)である。『古今六帖』は主に「万葉集・古今集・後選集」の3集の中の歌をとり分類したとされるものなので、「ひとつま」の題が見られるのはそう無理もない。しかしこの時期「ひとつま」は、恋十題でなく、雑思に分類され、その7首がある。

『古今六帖』以来、「ひとつま」の題が登場する類題集はまったくないと言っても過言ではない。つまり江戸時代の類題集からその題が見られるのがたった2集だけである。それが『類題恰野集』と『類題草野集』である。この両集は一葉が読んだとされる類題集でもある。要するに、一葉が『万葉集』は読んでいなかったとしても、この両集は読んだ可能性が高いということである。一葉文学の題詠手法からみてもこの2集は重要なのである。とくに『恰野集』は、題詠歌や類題和歌集の出版がより一般化になっていた江戸時代の代表的類題和歌集であり、時代の歌人である清原朝風が集大成した類題和歌集で、初学のための手本とすべく、勅撰集や私選集の中から秀歌を分類したものである。この『恰野集』時代の「ひとつま」はどのような歌であったかを見てみたい。引用すると次のようである。

---

10) 塩田良平・和田芳恵・樋口悦編、『樋口一葉全集』第四巻上、筑摩書房、1994、p. 171。

ひとづま
万　神樹にも手はふるとふをうつたへに人づまといへば触ぬ物かも
同　みれどあかぬ人国山のこの葉をぞたのかの心になづかしく思ふ
同　人づまに言ふは誰とさ衣の此ひもとけといふは誰こと
同　黒牛潟しほひの浦を紅の玉もすそひき行は誰つま
同　うち日刺みやぢにあひしひとづま故に玉のおのおもひみだれてぬるよしぞ多きせとうか
古　ひとゝせに一度きます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ
後　人づまに心あやなくかけはしのあやうき物は恋にぞ有ける
拾　すごろくのいちばに立る人妻の逢でやみなん物にやはあらぬ
同　ありとてもいへかはふる唐国のとらふす野べに身をも投てん
六　蘆のやのこやしのやの忍びにもいなノヽまろは人のつま也
同　人づまはもりかやしろかから国のとらふす野べかねて心みん
同　だれぞ此ぬし有人をよぶこ鳥声のまにノヽなきわたるらん[11]

前述の『万葉集』の歌が多く、『怜野集』の「ひとつま」も、人妻への思慕や、人妻に心をよせる危険な恋をしてしまったという心情などが詠まれている。とくに、『拾遺和歌集』から「ひとつま」として分類された歌が気になる。よみ人知らずの歌で、「双六の市場に立っている人妻は、他の男と逢わずに恋愛事が終わってしまうものではないか。自分も他の男に逢わずに終わらせたいと思っている」[12]という内容である。もう少し解釈を参考にすると、「貞女二夫にまみえずというような発想の歌」と述べている。これは、「ひとつま」の立場から詠んだ歌であると言える。また他の夫への思慕は書かれていないものの、一葉の作品『軒もる月』の主人公・袖は夫と子がいる人妻で、他の男から求愛され「二タ心」から悩んでいる状況を思わせる。

以上ように、一葉の「ひとつま」と伝統的な和歌「ひとつま」を調べてみたのであるが、禁止された人妻への恋慕や他人の夫への心乱れなど

11) 清原雄風、『和歌怜野集』、交盛館、1895。
12) 小町谷照彦校注、『拾遺和歌集』(『新日本文学大系七』)、岩波書店、1990。

危険な恋への心が詠まれていた。これは、ある程度一葉の人妻系列の作品に類似した点もある。しかし和歌と小説というジャンルの違いと一葉の創作方法から推測してみると、一葉の小説には、題詠の類型的な面を超えた新たな「人妻物語」が描かれたはずである。一葉は自ら歌人であった小説家という特殊性を生かし、和歌「恋歌」を近代において新た恋愛小説として描きあげた作家であったということは、初期作品をみればよくわかるところである。

なお、彼女の後半期の作品殆んどが「人妻物語」ということは、素材は和歌の「ひとつま」から採ったのかもしれないが、創作に用いる時は一葉なりの「人妻物語」を試みていったといえる。まだ結婚もしていない一葉が、わざわざ人妻のことについて物語ろうしたのは、確かに創作の狙いがあったからであろう。

もう一度繰り返すと、和歌の題詠から始まった人妻であるが、一葉は近代において新たな人妻を描きだそうとしたのではないかと推測される。とくに人妻が初登場する『雪の日』の主人公は、恋の成就を成し遂げた人妻にもかかわらず「恋ははかないもの」という心が乱れていく女性である。一葉がはじめて描こうとした「人妻」はどのようなものであったかを考察していきたい。

3.「人妻」物語の序幕—『雪の日』

1)『雪の日』の作品背景と先行研究

『雪の日』は、明治26年3月31日、『文学界』の第3号に発表された。明治25年12月26日、一葉は、萩の舎の姉弟子三宅花圃から北村透谷や星野天知らの『文学界』創刊の企画を知らされ、さらに、花圃は星野天知から小説依頼の手紙があった話とともに一葉にも小説を書くように勧

める。とくに当時一流雑誌とも言える『都の花』に載せた『うもれ木』で一葉に注目していた星野天知が、『文学界』創刊号に掲載する小説の依頼を花圃に入れたということがよく知られた事実である。このような流れで一葉は小説の依頼に応じて執筆に取り組むようになったのである。

半井桃水[13]の指導によって小説家としてデビューした一葉は、この頃桃水の影響から離れ、一葉独自の文学世界を築こうとしたのである。所謂「奇跡の時間」の前に書かれた『雪の日』『琴の音』『花ごもり』『やみ夜』の4作品は、いずれも『文学界』に発表された小説である。この時期は、一葉文学においても中期または転換期小説として区別されている。その中で、『雪の日』という作品を「人妻物語」の系列上に置いて考える時、「人妻」としてのキャラクターが薄いのも事実である。しかしながら、『雪の日』という作品全体を読みなおすと、いくつかの問題性を帯びている。これは、いうまでもなく「人妻物語」から見た見解である。つまり、①主人公・お珠は、故郷をふり捨てて恋する男性と一緒に出奔し結婚する人妻であること、②『雪の日』までの作品の中で恋の成就をなした作品はなかったが、『雪の日』ではじめて結婚という恋の成就をなす設定、そして③その恋の成就はハッピーエンドの結末であるはずなのにそうでもないということである。このような面で、人妻の性格はあまりつよくないのかもしれないが、恋の成就が必ずしも幸福につながるとは限らない人妻の人生への思索が作品に影響を与えたと判断するのである。

---

13) 半井桃水(1860～1926)は、4人弟妹の長男として対馬厳原藩、現在の長崎県対馬市厳原町に生まれる。父の仕事の関係で少年期は釜山で過ごす。明治21年に東京朝日新聞の記者となる。翌年、同紙上に『唖聾子』を掲載、続いて『しぐれ縁』『海王丸』などで新聞小説家としての地位を確立、明治24年から連載した長編『胡沙吹く風』が代表作。同年、樋口一葉が門下に加わる。一葉の処女作『闇桜』は桃水の校閲を経て『武蔵野』に発表された。しかし翌年、一葉は門下を離れたが、同時期一葉と恋人関係にあったという噂があったからである。

そういうわけで、ここでは、『雪の日』が「奇跡の時間」に書かれたほかの5作品(ほとんど明治28、29年のもの)に重要な役割を果たしているという点を探っていきたい。その時、馬場弧蝶も認めている通り、早くから論じられてきた作品『雪の日』と一葉の日記に登場する「雪の日」の関係性や、作品の材料などを踏まえながらも、一人称回想形式をとって『雪の日』から語ろうとした中心的なイメージないしはその心理はどのようなものなのか、「人妻」系列作品の中ではどんな意味を持つのかを考察していくことにする。このような考察は「人妻」物語の系列の小説を把握するにおいてその関門になると期待する。

先行研究から『雪の日』の評価はあまり高くないということは、当時の一葉の日記に登場する花圃[14]の「君の『雪の日』は例の出来よりわろき様におもへど、世の評はいかなるかしらず」という話しからもわかる。その評価は引き継がれきた。たとえば、塩田良平氏は、「『文学界』に掲載されたものとしては新味に乏しく低調なものであったが、珍しく習俗に反した恋愛を扱っている」[15]と述べたのが定説のようになっているほどである。

以降の研究をもう少し調べてみると、『雪の日』という題名が明治25年2月4日の日記に記されていることから、青木一男氏は「「雪の日」と一葉」で、腹稿と小説化された『雪の日』とは多少異なったという点を指摘した[16]。とくにその理由として、着想から完成までの10か月の間の作家的成長、師桃水と絶交による改変、師桃水と一葉の関係を連想するような作品は避けたからとあげられている。このように、腹稿と小説の違いは現在まで偶々論議されてきている。

---

14) 「よもきふにつ記」(明治26年2月11日)

15) 塩田良平、「一葉作風の展開」、『国文学解釈と鑑賞』2-11、至文堂、1957.11。

16) 青木一男、「「雪の日」と一葉」、『解釈』4-7、解釈学会編集、1958.7、p. 29。「腹稿が、小説「雪の日」と同一の構想のものでなかったとしても、雪の日を背景として男女の愛情問題を書こうと思ったと想像してもさしつかえない」

これに対して、山田有策氏の「「雪の日」についての一考察」[17]は、前記青木論文を発展させながらも、一人称回想形式をとることで一葉は初めて自己の内面を表出するようになったと述べた。つまり、初期一葉における物語と日記との乖離現状がここで消失し、物語と日記がクロスしたわけで、この『雪の日』を書くことで一葉は初めて小説家としての自立をつかみかけたと指摘したのである。その他の論考も一葉自身の体験との関係性を中心としたものが多い。『雪の日』については日記に記された一葉の体験との関係も無視できないが、それについてはこれまでの論考でほぼ言いつくされた感じが強い。このように、『雪の日』論は成立過程を中心とした形で論じられてきたものが多い。

それでは、一葉の文学史上で『雪の日』の位置はどうであろうか。前述した通り、この時期は一葉の作家としての思想的成長期であり、後の軌跡の期間への突破口を開く時期でもある。だからこそ一葉は、『雪の日』を通して深い心像を表現しようとしたのではないか。それを腹稿と小説とを確認して考えていきたい。

2)「種々の感情むねにせまりて」の「雪の日」

「雪の日」を考える時、自然に二つの雪を浮かべる。一つめの「雪の日」は言うまでもなく一葉が書いた小説の『雪の日』である。二つめの「雪の日」は、一葉の日記に登場する師半井桃水との逸話であろう。明治25年2月4日の日記の中で「雪の日といふ小説一篇あまばやの腹稿なる」と記されて、その一年後、小説『雪の日』は書かれたが、腹稿は多少異なった形で小説化される。

一葉は、知人である野々宮菊子の紹介で明治24年4月15日、初めて

17) 山田有策、『深層の近代―鏡花と一葉』、おうふう、2001、p. 239。初出『東京学芸大学紀要』28、1976年11月である。

師半井桃水と直接顔を合わせて以来、小説の指導を受けながら頻繁に桃水のもとを訪れた。この時、桃水への一葉の思いが「恋」であるかどうかはまだわからないとしても、かなり特別なものであって、この雪の日の25年2月4日には非常に感情が高まっていたことは事実であろう。実はこの雪の日までの交際の間である明治24年9月26日、すでに野々宮菊子から桃水にまつわる悪い噂[18]を耳にしていた。その噂のため心配と不安のなかであったのにもかかわらず、一葉の感情はもっと高まっていったのである。この明治25年2月4日も、一葉は、この雪の日について詳しく書き残している。日記の描写は、ただ日記という記録ではなく、短編小説の趣を感じさせるほどの感情があふれている。

この雪の日を迫ってみたいが、日記の冒頭を引用すると次の通りである。

> 早朝より空もようわるく、「雪なるべし」などみないふ。十時ごろより霙まじりに雨降り出づ。晴てはふり／＼ひるにもなりぬ。「よし雪にならばなれなじかはいとふべき」とて、家を出づ。真砂町のあたりより、錦をちぎりたる様に、大きやかなるもこまかなるも小止なくなりぬ。[19]

朝から空模様が悪く、10時頃から雪が降り出す中を一葉は家を出

---

18) 一葉が桃水と出会った時から桃水家に同居していた福井県出身の鶴田たみ子という女性にまつわる話であった。彼女は桃水の妹幸子の学友で、桃水家に寄宿して高等女学校に通っていたが、明治24年7月に桃水の平河町の「隠れ家」で女児を出産していた。野々宮菊子はくににその父親は桃水ではないかと告げていた。実際のところ、その女児は桃水の弟である浩の子であった。しかし一葉はなくなるまで桃水の子であると思っていたようである。この問題は一葉が桃水への恋を封印する一つの要因になった。以上の説明は、木谷喜美枝、『樋口一葉と十三人の男たち』、青春出版社、2004、p. 54から引用した。

19) 以下、用いるテキストは、前田愛・岡保生・木村真佐幸・山田有策校注、『全集樋口一葉』小説編①②、日記編③、小学館、1996年のものにする。

た。やがて大雪に変わったので、一葉は途中人力車をひろって桃水のもとへ向かい、桃水の家に着いたのは12時を少し過ぎた頃であった。呼んでも返事がないので留守かと思われたが、待つことにした。「雪はたゞ殴ぐる様にふるに風さへそひて格子の隙より吹入るゝ寒さ」に我慢できなかった一葉は、障子を細めに開けて玄関の二畳に上がった。「朝日新聞」と新聞「国会」、朝鮮の釜山から手紙などが配達されたままになっていた。向こう側の居間で桃水がまだ眠っているらしく、いびきの声が聞こえた。一時を知らせる時計が打つと心細くなって咳などをして見ると、やがて桃水は目覚めた。桃水は「これは失礼」と言って、昨日は歌舞伎に行って午前一時に戻ってから原稿を書いたので起きるのが遅くなったと説明した。また桃水は一葉を部屋に迎え入れるために顔を洗い、火を起こし、湯を沸かすなどで忙しい。一葉は、そんな桃水の振る舞いや、部屋の様子を細かく描写している。その後、例の『武蔵野』の創刊の話をするが、一回、二回は原稿料を出せないけれど、少し売れるようになったらまず一葉に支払うと言った。

やがて桃水は隣の家へ鍋を借りに行ったが、その部分からまた引用すると次の通りである。

> 若き女房の、「半井様お客様か。お楽しみなるべし。御浦山しう」などいふ声、垣根一重のあなたなれば、いとよく聞ゆ。「イヤ別して楽しみにもあらず」などいふはうし也。「先程仰せられし、あのおかたか」と問はれて、「左なり」とひたるまゝ、かけ出して帰り来たまへり。「雪ふらずは、いたく御馳走をなす筈なりしが、この雪に而は画餅になりぬ」とて、手づからしるこをにてたまへり。「免し給へ。盆はあれど奥に仕舞込みて出すに遠し。箸もこれにて失礼ながら」とて、餅やきたるはしを給ふ。ものがたり種々。うしが自まんの写真をみせなどし給ふ。

日記をたどって見ると、直接恋という言葉はまったく出てこないが、一葉が桃水に会えば会うほどもっと強く感じる彼の親切さ、優し

さにいつのまにか胸が打たれたのではないだろうか。一葉は桃水への特別な感情が高まっていったのであろう。そんな中、一葉が帰ろうとすると、桃水は、たいへん雪が降るから、「今宵は電報を発してこゝに一宿し給へ」と言った。一葉は「などかわさることいたさるべき。免しを受けずして、人のがりとまるなどいふ事、いたく母にいましめられ侍　る」とまじめな顔で言ったが、一葉の心の揺れは勿論のこと、桃水への思いが高まる要因になったに違いない。帰りの人力車上で「種々の感情むねにせまりて雪の日といふ小説一篇あまばやの復稿なる」と考えたのは、一葉の感情が非常に高まっていたあかしであろう。このような感情は、若き少女一葉にとって、明確な恋としては認識していないものの、今まで和歌から詠んできた恋歌のような、また王朝文学などで経験してきたロマンや恋などのような感情を実際に感じることになったのは確かであろう。雪の中で桃水宅を訪れた一葉は、忘れられない一日を過ごす。桃水への「愛が極点に行った」[20]、「恋情が、もっと高調する」[21]と言われる「雪の日」である。このようなロマンチックな感情と目にした情景などは一つの小説のようなイメージがある。実際に発表された小説『雪の日』(明治26年3月)は、桃水との絶交という状況で書かれたのでその感情の高調などは日記と違いが多少ある。しかし、別れた「後になって桃水への恋情が高まり、『雪の日』を恋しく思い出している」[22]というのが一葉の心境であったにちがいない。あの頃の「雪の日」の追憶は、一葉の純粋な恋情を連想する特別なものになっていたのであろう。

---

20) 和田芳恵、『樋口一葉』、新潮社、1954、p. 20。
21) 橋本威、『樋口一葉作品研究』、和泉書院、1990、p. 68。
22) 前掲論文。

3) 小説『雪の日』—悔恨にうち沈む人妻

(1) 小説の内容と構成

明治25年2月4日、「雪の日」という小説を書こうとした一葉と、26年の一葉はどう違ってきたのか。小説の世界に入門し、桃水の指導を受けながら小説を書き上げ始め、さらにその師である桃水との恋情、決別、そして『文学界』にデビューなど、一葉はこの一年あまりの間に外部的であれ内部的であれ激しい変化があった時期である。この変化は執筆にも影響があったと推し量るのは難しくない。

さて、小説の内容と構成について触れながら、『雪の日』を把握していくが、まず、その梗概を見てみよう。

> 雪の降りしく風景にながめ入りつつ、珠は深い悔恨にうち沈まざるを得ない。全ての過ちはこの雪の日にあったのである。
>
> 珠は山里の草深い小村に生まれた。両親を早くに失い、母の姉にあたる伯母のもとで蝶よ花よと大切にいつくしみ育てられた。幼児から小学校の桂木一郎先生に愛がられ、幼心に何のやましさもなく募っているうちに、いつの間にか村の噂になっていた。珠が15歳、桂木が33歳の時である。伯母は激しく悲しみ怒り、珠を責め、会うことを厳しく禁じた。珠は噂を信じた伯母が恨めしく泣きくずれたが、心の底にうごめく駒の狂いには気がつかなかった。1月7日の雪の降る日、伯母の留守中、雪の舞いをながめていた珠は桂木への慕情につき動かされ、作男をだまして、彼の下宿先へとひた走ってしまったのである。そして、それが伯母も故郷もふりすてての出奔に直結したのである。
>
> 今、東京で桂木の妻となっている珠は雪の降る景色に見入りつつ、つれない夫に変貌した桂木やはかなく死んだと伝えられる伯母のことを想い、全ては誤りだったとも深い悔恨にうち沈むのである[23]。

---

23)『全集樋口一葉』小説編一、小学館、1996、p. 176、山田有策の概要を参考した。

つまり、現在―過去―現在という形で、現在は人妻になっているお珠が、夫桂木一郎と出奔したあの過去の雪の日を回想する内容である。

一葉の作品にとって初の一人称回想形式の小説であり、とくにお珠の内面に焦点をあてた短編小説である。小説の展開においては、冒頭と末尾はお珠の現在の心境を、中心部は回想の内容である。この二つの心境は変化しており同じ感情ではない。これは、お珠の過去と現在の二つの間に距離感を与えることによりヒロインであるお珠の現在の心境がもっと浮き彫りにされる効果を得ていると思われる。つまり、過去の回想は今現在の心境を代弁するための装置であると同時に、その経験があったからこそ、現在お珠を通してアピールしようとする作者の思想が効果的に描かれることができたといえる。

(2) 冒頭と末尾から現れる思想

『雪の日』一人称回想形式で、現在―過去―現在という形で、現在は人妻になっているお珠が過去を回想する小説なのである。とくに、冒頭と末尾の段落で、現在のお珠の内面の心境を表出している。つまり冒頭と末尾から作者の思想が表われてくると言えよう。

確かに一葉は桃水との決別から、一葉の恋の思想は「恋ははかなきもの」となり「行雲流水」[24]の形に変質していく。さらに明治28年頃は、生活環境と密接になった描写も、より一層写実的に変化していく。『雪の日』の中では、その「恋ははかなきもの」というような思想が見え、後期の作品においては、人生のはかなさに注目を当てるようになった。それは結婚という社会枠に束縛された女性を「人妻物語」として試みられ

24) 岩井照代(ほか)編、『樋口一葉事典』、おうふう、1996、p. 383。事象が時の経過とともに消失する非存在性を表現する言葉。万像の非存在を認識して全く執着を持たないで、物事に応じ従って行動する思想から出ている。

るようになるのではないかと思われる。一葉の生きた時代は、女性と男性の置かれている社会的立場がかなり違い、結婚生活においても男女の温度差があった。夫のある妻だけに成立する明治民法の姦通罪のもとでは、かえって女性がその制度に縛られるようになる。しかも一葉の時代には近代的な一夫一婦制はまだ法的に確立されておらず、日清戦争との関係で女性は社会的により抑圧された時期でもあった[25]。このような結婚制度の中の人妻を描く前段階として描かれたのが『雪の日』であろう。恋して結婚したのに、むなしく悔恨の心境を表出する人妻という自体がそのあかしである。

それでは、『雪の日』の情緒がどうであるか、冒頭から確認したい。引用すると次のようである。

> 見渡すかぎり地は銀砂を敷きて、舞ふや胡蝶の羽そで軽く、枯木に春の六花の眺めを、世にある人は歌にも読み詩にも作り、月花に並べて称ゆらん浦山しさよ。あはれ忘れがたき昔しを思へば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔の八千度その甲斐もなかれど、勿体なや。父累代墳墓の地を捨てゝ、教育の恩ふかき伯母君にも背き、我が名の珠に恥かしき今日、親は瑕なかれとこそ名づけ給ひけめ、瓦に劣る世を経よとは思しも置かじを、そもや谷川の水おちて流がれて、清らかぬ身になり終わりし、そのあやまちは幼気の、迷ひは我れか、媒は過ぎし雪の日ぞかし。

ここでは、世の中の人は雪を眺めながら感じる平穏な心情や雪の美しさを表現するかもしれないが、お珠は忘れがたい昔を思うと無念で悲しい、と述べている。また、「舞ふや胡蝶の羽そで軽く」[26]か

---

25) 座談会「樋口一葉ーそれまでの、そしてこれからの」、『国文学解釈と鑑賞』68-5、至文堂、2003.5。薮禎子氏、佐伯順子氏、管聡子氏の座談会の内容から参考した。

26) 橋本のぞみ氏が「語る言葉を失くすとき―樋口一葉『雪の日』の別れ」(『明治女性文学論』、翰林書房、2007年11月20日)の注(4)で、「舞ふや胡蝶の羽そで軽く」典拠を「荘周の夢」と解釈したのを強調している。

ら、この小説の主題が予測できるが、思い浮かぶのは「胡蝶の夢」である。美しい雪をたとえたもので、世の中の人はこれを眺めながら歌や詩にも読むかもしれないと表現している。しかしお珠は昔を思い出すと、現在のこの雪が悲しいと言っていることから、同じ雪でありながら、眺める人の感情によって雪は区別される。つまり、どちらのほうが正しい見解かということも判断しにくくなってくる。いわば「胡蝶の夢」のように、「荘子が胡蝶となった夢を見、さめた後、自分が夢で胡蝶となったのか、胡蝶が今夢の中で自分になっているのか疑ったという「荘子―斉物論」」[27]の故事のことであろう。ここで一葉は、お珠をかりて「恋のむなしさ」ないしは「人生のむなしさ」を語ろうとしたのではないかと考えられる。

次の故郷を捨て、恩ある伯母にも背いた自分が恥ずかしいばかりで、今後悔してももう後悔先に立たずと、その過ちを犯したのはお珠自分であると述べている。またその媒になったのは、昔の雪の日であるといいながら、次は過去の回想を語り始める。その過去とは一致できない現在が存在する。その効果として、読者を一歩退いた地点から次の回想に移動するようにしているのである。なぜ、作家は、このような効果を狙ったのかは、末尾の部分をみれば推測できるのであろう。末尾を見てみよう。

> かくまでに師は恋しかりしかど、夢さらこの人を良人と呼びて、共に他郷の地を踏まんとは、かけても思ひ寄らざりを、行方なしや迷ひ、窓の呉竹ふる雪に心下折れて我れも人も、罪は誠の罪になりぬ。我が故郷を離れしも、我が伯母君を捨てたりしも、この雪の日うるはしきに、深山木の我れ、立ち並らぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔しを問へば、何ごとも総べて誤なりき、故郷の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎げきて、その歳の秋かなしき数に入り給ひしとか。悔こそ物の終りなれ、

27) 北村孝一、『ことわざ大辞典』、小学館、1982。

今は憂世に何事も絶えぬ。つれなき人に操を守りて、知られぬ節を保たんのみ。思へば誠と紫式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を、知らじな雪の今歳も、又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る、我れは昔しの恋しき物を。

なぜ、お珠が眺める雪の日の風情は、世の中の人とは異なると述べているのか。それは、まず、恋した師の妻にはなっていても伯母を捨て故郷を離れたのは、誠の罪という自覚からであろう。さらにその恩ある伯母の死の便りはその後悔をもっと深くしたのである。次は、それよりもっと今の悔恨が深いのは、つれない夫、つまり恋してすべてを捨てて出奔したのにむなしくその恋は変わってしまったからであろう。何のために出奔したのであろうか、人の心は永遠ではないのだと、悔恨の心は深くなっていったのではないかと思われる。最後の紫式部の和歌は、今お珠の心境、作者の心境がそのまま反映されていると言えよう。次のようである。

思ふこと待りけるころ、初雪の降り侍りける日
ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭に積る初雪

「悩むことがありましたころ、初雪のお降りました日、生きて過ごしていると、このように、辛さばかりがくわわる世であることを知らないで、荒れている庭に降り積もる初雪よ」[28]と詠んでいる。これを『雪の日』に対比してみると、結局雪はいつもの雪だけれど、眺める人の心の安否によって愛らしい雪であったり、悲しい雪であったりするという意味であろう。要するに、一葉の腹稿の「雪の日」の雪が恋しい雪であったとすれば、師と決別した後の雪は、同じ恋しい雪ではなかったはずである。言い換えれば、小説『雪の日』の雪も二

28) 峰村文人校注、『新古今和歌集』(『新編日本古典文学全集 43』)、小学館、1974。

つの雪が存在したのである。お珠が師と共に出奔を敢行する時の雪は確かに恋しい雪であった。しかし師桂木の人妻になった現在は、切ない夫に悲しい思いを持っている悲しい、むなしい雪である。上記の「胡蝶の夢」と同じように、世の中のことは何かはっきり区別しにくい、さらに何が正しいか定義しにくいものであり、そのむなしさを恋の成就を成した既婚女性お珠を通じて描こうとしたのが『雪の日』であろう。

一葉は、作品の中で恋愛を表現するにおいて、主に悲恋を用いてきた。つまり一葉の作品の主人公は、恋の成就がなかなか果たされず、悲恋に終わる。しかし、この『雪の日』では、珍しく恋の成就をなしている。が、成就をなした恋は永遠だろうという思いに背くように、人妻になった今、その夫の切なさに嘆いている。つまり、一葉は世の中で恋の成就をなしたといっても、結局永遠なるものはないという悟りを得たのではないか。この『雪の日』の段階では、まだ、人妻の描写についてはっきりとした意識はなかった。しかし、一葉は、恋の成就という結婚の後はどうであったかを描きたかったのではないか。世の中というものが、恋の成就をなしたらすぐ幕を閉じたり、あるいは恋が永遠に続くという世界ではないということを提示したかったのではないか。言い換えてみれば、一葉にとって明治の結婚は、娘の恋物語とはまた違うパターンの宿命ないしは運命の難関にぶつかっている問題であったはずである。その中で、人間の内面、とくに人妻の内面、社会の内部のディテールを描いたのが、後半部の人妻系列の作品であると思われる。その意味で、この『雪の日』は、一葉の思想が潜められていると言えよう。

(3) 萩の舎の醜聞と『雪の日』

一葉が小説の中で表現する時、一葉の経験や出来事など身の回りの

ことを巧みに用いるのが一つの特徴であると言える。当たり前のことで、この小説の中でも、二つの大きい出来事を用いている。まず、一葉の両親が故郷から出奔したことを素材としたのはよく知られている。次は、一葉の師桃水と一葉が決別するように勧める逸話、つまり萩の舎の師中島歌子との相談の場面である。

一葉が自ら桃水に絶交を告げることになったのは萩の舎での醜聞が一つの原因であった。明治25年6月に入って中島歌子の母親が亡くなっている。その法事が12日にあり、その場に行ったがその頃には一葉と桃水のことは萩の舎の中で知られており、一葉の評判も悪くなっていた。噂というより醜聞になっていたため、これを肌で感じた一葉はその二日後の6月14日、師匠である中島歌子に相談する。その場で一葉は、中島歌子に、桃水という人と「行末の約束」をしているのかと聞かれ、それについて「こは何者そ。行末の約はさて置て、我いさゝかもさる心あるならず師の君までまさなき事の給ふ哉」と口惜しい気持ちを伝える。そして中島歌子は「実は半井といふ人君のことを世に公に妻也といひふらすよしさる人より我も聞ぬ」と言い、一葉は大変驚く。零落したとしても士族の娘として誇り高くしていた一葉にとって、このような不名誉の噂は耐えられないことであっただろう。それがたとえ桃水への恋情が芽生えて心を寄せるほどになったとしてもそう簡単に受け流すことではなかったはずである。そんな一葉は「問ひ極め給ふも悲しく、我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給うふが恨めしく、人目なくは声立ててても涙かまほし」と心境を吐露する。さらに自分の「潔白の身」を訴えている。

この記事の場面は、『雪の日』の中で、お珠が師桂木との噂を伯母から問い極める真面とオーバーラップする。後述するのだが、中島歌子に桃水との別れを勧められ帰ってきた一葉は、なかなか眠れなかった。その翌日の15日、桃水を訪れた一葉は中島歌子の教え通りの萩の

舎の手伝いなどの口実を並べ立てながら、今後の訪問は難しくなったことを説明した。そして桃水から勧められた尾崎紅葉との面談についても自ら断ってしまったのであった。一葉が完全に絶交を告げたのは6月22日のことである。一葉は別れの気持ちを「哀に悲しく涙さへこぼれぬ」と日記に書いているが、一葉は、本心とは違って、桃水ではなく中島歌子を選んだ。つまり自分の感情のままではなく、萩の舎などの世間の評判を選んだのだ。その理由は「萩の舎」での醜聞が原因であったのだが、それだけではなかったはずであろう。一葉にとって、小説の世界に入門したというものの、まだ売れる気配もなく、生活は前と変わることもなく、まだ「萩の舎」の人々は捨てられない存在であったのではないか。7年間通い、付き合ってきた人々の忠告を無視することは出来なかったと思われる。表面的には決別を告げた一葉が、その後もずっと桃水との関係は捨てきれなかったという事実は、一葉にとって桃水の存在は、師以上のものであったことがわかる。その煩悶の中で出されたものが「厭ふ恋」であり、「行雲流水」という思想をも生み出すようになったのである。

一葉と師中島歌子の逸話は、『雪の日』の中でどう生かされているのか見てみよう。

漸々伯母君の詞するどく

よく聞けよお珠、桂木様は其方を愛で給ふならん、其方も又慕はしかるべし。されども此処に法ありて、我が薄井の家には昔より他郷の人と縁を組まず。況てやいかに学問は長じ給ふとも、桂木様は何者の子、何者のた種とも知らぬを、門閥家なる我が薄井の聟との言ひがたく、嫁にもやりがたし。よし恋にても然かぞかし。無き名なりせば猶さらのこと、今よりは構へて行来もし給ふな、稽古もいらぬ事なり。其方大切なればこそお師匠様と追従もしたれ、益もなき他人を真重には非らず。年来見事に育て上げて、人にも褒められ、我れも誇りし物を、口惜しき濡れ衣きせられしはあの人ゆゑなり。今までは今までとして、以来は断然と行ひを改ため、其方が名をも雪ぎ、我が心をも安めくれよ。兎角に其方が仇はあの人なれば、

家を思ひ伯母を思はゝ、桂木とも思すな、一郎とも思すな、彼の門すぎるとの寄り給ふなと畳みかけて仰する時、我が腸は断ゆるばかりになりて、何の涙ぞ睚に堪えへがたく、袖につゝみて音に泣きしや幾時。口惜しかりしなり、その内心。

「いかに世の人とり沙汰うるさく、一村挙りて我れを捨つるとも、育て給ひし伯母君の眼に我が清濁は見ゆらんものを汚れたりとや思す恨めしの御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覧じ知る筈を、誰が讒言に動かされたか打捨て給ふ情けなさよ。成らばこの胸かきさばきても身の潔白の顕はしたや」

つまり、いつの間にか村の噂になっていた珠と桂木のことについて、伯母は激しく怒り悲しみ、珠を責めた。さらに会うことを厳しく禁じたのである。伯母は、お珠のことを信じようとも、真実を聞こうともせずに、お珠を責めたのであって、そこで、お珠は狂気が湧いてきたのかもしれない。この場面は、一葉の萩の舎の醜聞とオーバラップする。一葉も、一葉の真実は誰一人も聞こうともせず、親のような「萩の舎」の師匠にまで責められて、逢うことを禁じられたのである。その当時の一葉の心境を、お珠をかりてそのまま描いたと思われる。一葉は、世の中のことが自分の考えや意地ではなく、周りの噂や倫理的観点などによって流れていく場合が多いこと、つまり社会的な視線で、自分の恋が折れた出来事であるため、世の中のことが、はかない、むなしいと思っていたのかもしれない。

四．結論

一葉の禁忌された人妻への恋がどれほど危険であるかという内容の「ひとつま」は、伝統的な和歌の「ひとつま」と一脈相通じる。これは『万葉集』や一葉が読んだとされる『怜野集』を調べてみたうえで下した結論

である。

一葉の和歌「ひとつま」は、現代の結婚制度からみれば、不倫ともいえる恋であるが、それでもあの時代は和歌として自由に詠まれたことになる。伝統的な和歌の世界で育てられた一葉にとって「ひとつま」は十分に詠める歌である。それにしても、この「ひとつま」という兼題を生かし、まったく新しい世界である小説において描こうとしたのは、はやり一葉の創作の仕組みであろう。要するに、和歌から兼題「ひとつま」を採ったというものの、その表現においては人妻を主人公とし、人妻という人間の処した世界を描こうとした。さらに、一葉の「人妻」は、6作品の中において様々な形で試みられたのである。

その「人妻物語」の始まりとして、一葉は『雪の日』を通して表現したのである。一葉が日記に書いた「雪の日」は桃水との出来事とその恋情の高調を連想できる恋しい「雪の日」であったが、小説『雪の日』は、恋情を抱いていた桃水との噂で決別という決断を下した後発表されたもので、小説の中ではその恋情の高調は過去のこととして、現在は夫のせつなさに悔恨するお珠が語られた。一葉の「雪の日」が変貌したのは、一葉の心境が変化したためであることがわかった。

つまり、恋の変わりあるいは人間の心の変わり、さらに世の中で変わりない物はないという人生の虚無に目を当て、そのような世界を描こうとしたのが、一葉の創作の狙いであったと言えよう。もちろん、この時期はまだ一葉の結論した「厭ふ恋」[29]の恋物語において

---

29) 李政殷、「一葉文学における和歌「厭恋」の受容」、『人間社会環境研究』 1-8、金沢大学大学院人間社会環境研究科、2009.9月、樋口一葉は、明治26年7月5日の日記の余白に、「恋ハ」という自分の恋愛観を書き付けている。その中で恋の本質を結論して「其厭ふ恋こそ恋の奥成けれ」と言っている。つまり「恋の極致」を「厭ふ恋」と決定しているが、これは一葉の創作にも使われている。ところで一葉の作品『にごりえ』に至るまで、彼女の心境の推移によって次第に展開されているが、もちろんこれも和歌の「厭恋」から採ったものであると考察した論を参考した。

も明確になっていない時であった。一葉の思想の変わりも確立されていない時であったため、『雪の日』という作品の中で流れる思想性というものは微かであって曖昧な面もあるのも事実である。しかし『雪の日』の冒頭の「胡蝶の夢」や末尾の紫式部の和歌などを創作に用いることによって、変わりやすい世の中の事、人生の虚無などの思想がベースになっていることは確かである。この思想は恋の成就を成し遂げれば本当に幸せであるか、人妻の人生の幸福は何かを真正面から考え書き出したのが、現実の社会を生き続けていく「人妻物語」であろう。

先立って、「人妻物語」としての『雪の日』を考えるとき、その問題を提起したのであるが、それに付け加えると、まず、①主人公・お珠は、故郷をふり捨てて恋する男性と一緒に出奔した無謀とも言える女性であること、次は②『雪の日』までの作品の中で、恋の成就をなした作品はなかったが、『雪の日』に至ってはじめて結婚という恋の成就をなす設定をしたこと、③その恋の成就はハッピーエンドの結末であるはずなのにそうでもないということである。つまり、昔、雪の日の二人は恋だけを求めて出奔し結婚するくらい、恋しい雪であったのに対して、時間が流れるにつれてその恋しい心も変わってしまい、現在の雪の日は、故郷を振り捨てた自分も、つれない夫も、全てが悔恨に残るというお珠の心境が反映されている雪の日である、大きい思想の変化がみえてくるのである。最後に④人妻になった主人公お珠は、夫のつれなさの中でも生きていく女性であること、つまり一葉の初期小説である『闇桜』『五月雨』『別れ霜』『うもれ木』などの女性は男性との恋情の関係性によって死の道を選ぶのであり、恋愛や結婚などを拒絶する「厭ふ恋」の作品『暁月夜』『闇夜』『にごりえ』の女性も、死に至ったり、相手から逃げていったりとする結末である。それに対して、『雪の日』をはじめとする「人妻物語」は、どんなに苦しい現実であろうと、それでも生きて行く決心をする人妻が登場する。さらに後の作品では、(ど

んな形でも社会的枠に結び付けられている)人妻たちが、その社会環境の中で一人の人間として、どのように生きていったのかを写実的に描こうとしたので、『雪の日』に流れる人生の虚無という情緒は見逃せない問題であろう。要するに、『雪の日』からみえる微かな思想は、「人妻系列」にもつながり本格的な「人妻物語」が描かれるようになる。その意味で、『雪の日』は、「人妻物語」の中で、その序幕を知らせた作品であると言えよう。

このように、本稿では、伝統的な和歌の「ひとつま」はどのように詠まれたを明確にした上で、人妻」物語の序幕をしらせた『雪の日』を考察してみたのだが、本稿の論をより一層固めるためには、今後『雪の日』以外の人妻系列の5作品を把握する必要がある。さらに人妻の生き方を明らかにするのは勿論のこと、「人妻物語」への試みが、一葉文学上においてどのような位置に置かれるか、新たに測定しなければならない。この研究がまとまったら、一葉の研究史上に新たな「人妻物語」という課題を提示する論になると期待される。

参考文献

<全集>
清原雄風、『類題怜野集』、出雲寺文治郎、1806。
清原雄風、『和歌怜野集』、交盛館、1895。
木村定良、『類題草野集』、出雲寺文治郎、1817。
峰村文人校注、『新古今和歌集』(『新編日本古典文学全集　43』)、小学館、1974。
北原孝一、『ことわざ大辞典』、小学館、1982。
小町谷照彦校注、『拾遺和歌集』(『新日本文学大系七』)、岩波書店、1990。
塩田良平・和田芳恵・樋口悦編、『樋口一葉全集』第四巻上、筑摩書房、1994。

小沢正夫・松田成穂校注、『古今和歌集』(『新編日本古典文学全集11』)、小学館、1994。
小島憲之・木下正俊・東野治之校注、『万葉集』①(『新編日本古典文学全集6)、小学館、1994。
小島憲之・木下正俊・東野治之校注、『万葉集』②(『新編日本古典文学全集7)、小学館、1995。
小島憲之・木下正俊・東野治之校注、『万葉集』③(『新編日本古典文学全集8)、小学館、1995。
前田愛・岡保生・木村真佐幸・山田有策校注、『全集樋口一葉』①②③(小説編一、二、日記編)、小学館、1996年復刻版。
岩井照代(ほか)編、『樋口一葉事典』、おうふう、1996。

<研究書>
和田芳恵、『樋口一葉』、新潮社、1954。
笹渕友一、『「文学界」客員論―「文学界」同時代論』、明治書院、1963。
村松定孝、『評伝樋口一葉』、実業之日本社、1967。
塩田良平、『樋口一葉研究』、中央公論社、1968。
松坂俊夫、『樋口一葉研究』、教育出版センター、1970。
関良一、『樋口一葉考証と試論』、有精堂、1970。
松阪俊夫、『鑑賞日本現代文学2樋口一葉』、角川書店、1982。
湯地孝、『樋口一葉論』、日本図書センター、1983。
松坂俊夫、『樋口一葉論』、日本図書センター、1983。
前田愛、『樋口一葉の世界』、平凡社、1987。
橋本威、『樋口一葉作品研究』、和泉書院、1990。
滝藤満義、『一葉文学生成と展開』、明治書院、1998。
山田有策、『深層と近代―鏡花と一葉』、おうふう、2001。

<論文>
塩田良平、「一葉作風の展開」、『国文学解釈と鑑賞』2-11、至文堂、1957.11。
青木一男、「「雪の日」と樋口一葉」、『解釈』4-7、解釈学会編集、1958.7。
蒲生芳郎、「雪の日」、『国文学解釈と鑑賞』51-3、至文堂、1986.3。

山田有策、「樋口一葉作品事典」、『国文学解釈と鑑賞』39-11、至文堂、1994.10。
屋木瑞穂、「記憶の風景―樋口一葉「雪の日」論」、『語文』77、大阪大学国語国文学会、2001.12。
青木一男、「「われから」―人妻物語への試み」、『国文学解釈と鑑賞』68-5、至文堂、2003.5。
薮禎子ほか、「樋口一葉ーそれまでの、そしてこれからの」、『国文学解釈と鑑賞』68-5、至文堂、2003.5。
平田智子、『二つの雪―一葉『雪の日』を読む―』、『学芸国語国文学』40、東京学芸大学国語国文学、2008.3。

A Theory on Higuchi Ichiyo “Yukinohi”

- The Prelude of “Hitozuma” Story -

Lee, Jung-Eun

The literary basis for Ichiyowas Japanese poetry and its poetry composed on a set theme. In short, it is in Japanese poetry style, presenting the title and then composing a Japanese poem. Therefore, most of novels written by Ichiyo also adopted the form of first presenting the title and then developing the story. If we read all the works written by Ichiyo, we can find that almost each subject for the poem can be exposed to the work, which looks like “the love part” of a collection of Japanese poetry. In this way, Ichiyo touched the traditional Japanese poetry one side, writing out her own new modern novel style.

Especially, during the miracle 14 months, i.e., the second half literary period, we can estimate that the idea of making hitozuma as the protagonist in writing the novel was not from the idea of “hitozuma”, the subject for Japanese poem in creating novel. To give examples as evidence to support it, there would be “hitozuma” in the subject for the poem of “the love part” of a collection of Japanese poetry Ichiyo read during Edo Period and “hitozuma”, the Japanese poetry Ichiyo wrote. Like this, although there was “hitozuma” in the subject for the Japanese poetry, and also 6 piece of works written during the second half of Ichiyo about “hitozuma” story, it was yet little study on it. Moreover, there was not yet the view of narrating the early work, “Yukinohi” by way of “hitozuma” story.

This article focused on the work “Yukinohi” to study what is “hitozuma” of traditional Japanese poetry, how to describe in the world of novel from the view of making use of the technique of poetry composed on a set theme in the world of novel through the structure of works by Ichiyo.

To conclude, on one hand, it was composed the feeling of the sorrow, grief and oppressive feeling to be in love with hitozuma in the traditional Japanese

poetry “hitozuma”. On the other hand, Ichiyo not only composed “hitozuma”’s love in that way, but also developed the story which focused on the state of “hitozuma” who even though was placed under many regulation and restraint in the system of modern society, still live in the real world. “Yukinohi” among the works by Ichiyo, the two persons eloped to marry each other only in pursuit of love in the old days. In contrast with the beloved Yukinohi before, the Yukinohi at present, not only the heartless husband changed the beloved heart, but also abandoned home by she herself, all the remained regret of the state of mind was described in the work. Therefore, from the description of the confused heart of “hitozuma” in “Yukinohi”, the prelude of “hitozuma” story would start.

Consequently, this article will clarify the attempt Ichiyo described her own renewed modern “hitozuma” style in her work, while touching the traditional Japanese poetry “hitozuma” one side. At the same time, presenting the work “Yukinohi” which is as the prelude work can also make significant meaning on Ichiyo study.

Key words: Higuchi Ichiyo, Yukinohi, Japanese poetry, poetry composed on a set theme, Hitozuma, Hitozuma story

이정은
소속 : **日本 金沢大学**
人間社会環境研究科 博士後期課程(2013년3월 학위취득)
주소 : 702-741 대구광역시 북구 서변동 화성리버파크1단지 105동 901호
전화번호 : 010-6647-1997 / 053-951-1997
전자우편 : shiawase-lje@hanmail.net / shiawase2010@yahoo.co.jp

이 논문은 2013년 7월 10일 투고하여
2013년 7월 31일까지 심사 완료하여
2013년 8월 31일 게재 확정함.